

幕末の陽明学と梁啓超

北京外国語大学 院生 李璽

19 世紀 90 年代頃から 20 世紀初頭にかけて、近代中国の知識人はアジア初の近代化を遂げた国である日本を見本にし、その近代化の経験を受容し、中国の近代化に活かそうと試みた。彼らの中で最も積極的に日本の明治維新の原因を探り、それを自らの思想に受容した人物の一人として、梁啓超が挙げられる。梁は戊戌政変で日本への亡命を余儀なくされ、1898 年から 1912 年までの 14 年間にわたって日本で亡命生活を送っていた。この梁は明治時期の思潮から大きな刺激を受け、様々な啓蒙的文章などを通して、国内に日本の明治維新の経験を熱心に発信するとともに、中国人を近代国家の国民に養成することに取り組んでいた。

本報告では歴史的な文脈や思想史的な文脈で、梁啓超による「幕末の陽明学」理解、それに対する受容や思想的淵源を明らかにし、当時の時代課題と結びつけながらその政治的な意図を探究するとともに、梁による「幕末の陽明学」理解・受容が当時や後世に与えた影響をも考察してみたい。

梁は日本亡命以前からすでに康有為の影響のもとで、明治維新の成功が幕末の志士たちの奮闘のたまものだとしていたが、陽明学と幕末の志士精神とのつながりにはまだ気づいていなかったようである。日本亡命の 5 年目の 1902 年から、梁は陽明学こそが幕末の志士たちの精神の重要な源だと主張しはじめた。それから、梁は陽明学を自らの新民思想の重要な資源として、盛んに顕彰するようになった。梁のこの理解は明治時期の陽明学顕彰の思潮から影響を受けたと考えられる。

ところで、筆者の考察したところによると、梁の「幕末の陽明学」理解を解説するのに、「至誠」、「尚武」や「心力」がキーワードとなる。「至誠」とは「誠意」の極まりで、「誠」に対する「偽」は毛頭ないということである。梁は「至誠」を豪傑がある事業を成遂げるための不可欠なものとするほか、『松陰文鈔』（1906 年）で松陰の「至誠」という品格を反映した松陰本人の文章を抄録し、それを高く評価する。それに、『德育鑑』（1905 年）には陽明学、とりわけ劉巖山の「誠意」説を以って、至誠の精神を唱え、それによって「義」と「利」を弁別し、至誠の「真愛國」者になるように同胞たちに呼びかけた。以上からも窺えるように、梁は幕末の志士精神における「至誠」を高く評価するとともに、陽明学を以って「至誠」の品格を養成することを主張する。梁が儒学、特に陽明学を「至誠」説の資源としているが、梁に「至誠」に注目させたきっかけとしては、徳富蘇峰の『インスピレーション』からの示唆が考えられる。

そして、梁は陽明学から「発揚蹈厉」の精神を見出し、陽明学を「儒之侠風」を育むものとする。また、梁は「心力」を「尚武之精神」を養うための三要素の一つとしながら、

明治維新の成功が志士達の「心力」のたまものだと主張する。ここには「心力」によって養われる「尚武」精神を持つ、国のために死ぬことも恐れぬ新たな国民を養成しようとする梁の政治的意図が見られる。梁のこの主張は主に清末の魏源や龔自珍から康有為の「心力」説の流れを受け継いだものであるが、井上哲次郎らの陽明学理解からの影響も少なくなかったと思われる。

最後に、以上あげた梁の「幕末の陽明学」に関する思想が、当時や後世の中国の知識人たちに与えた影響を窺いたい。